

# 満州事変と近代子供観の大衆化：「大阪朝日新聞」の報道を中心として

著者名(日)	是澤 博昭
雑誌名	大妻女子大学家政系研究紀要
巻	51
ページ	73-82
発行年	2015-03-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00006008/">http://id.nii.ac.jp/1114/00006008/</a>



# 満州事変と近代子供観の大衆化 —『大阪朝日新聞』の報道を中心として—

是澤博昭  
家政学部児童学科准教授

## The Manchurian Incident and Popularization of View on Children in Modern Japan

Hiroaki Koresawa

Key Words: 満州事変 (Manchurian Incident), 子供観 (View on Children), 近代日本 (modern Japan), 大衆化 (Popularization), 新聞 (Newspaper)

### 要旨

本稿は昭和 6 年 (1931) の満州事変に関する『大阪朝日』新聞社の報道を中心に、子供や少女などが国内のイメージ形成のために活用される過程を描き出すことを目的とする。

けなげな子供・少女が平和・友好を訴える姿は、人々の共感と同情を得やすいテーマであることを、マスコミや教育関係者は、日米人形交流の成功体験をとおして学んだ。それが満州事変をきっかけとする新聞の報道合戦により、紙面で純粋無垢な子供をあえてセンセーショナルに取り上げることで排外熱を効果的に盛り上げる戦略として意図的に利用されている。1930 年代の日本では社会的弱者である子供を中心にした紙面づくりに共感するだけの購買層がすでに形成されており、それを大新聞は部数拡大を図るために活用したといえよう。

この頃、いわゆる近代子供観は日本で大衆化をはじめていたと推測される。

### はじめに

フランスの歴史家フィリップ・アリエスが、アンシャンレジーム期のフランス社会の生活を洗い出すことを通じて、「子供」および「子供期」という考え方が、近代的な家族の形成にともなって現れることを、明らかにしたことは、よく知られている<sup>1</sup>。つまり子供期は、一種の近代的な「制度」、歴史の一時期につくりだされた社会的観念だ、というのである。

<sup>1</sup> 杉山光信他訳『＜子ども＞の誕生』（みすず書房、1980 年）。

前近代の子供たちは、「家」の子供として生まれ、ある程度将来が決まった小さな大人として育てられた。しかし明治に入り近代国家の建設を目指し、さまざまな制度が整備されるなかで、新しい子供期の必要性が高まる。子供は「家」の子供ではなく、平等な個人によって構成される市民社会の一員となるために、社会や家庭で保護され、学校で教育される存在となる。明治政府は、近代国家を担う国民として子供を育成するために、欧米的な教育制度をとりいれ、明治 5 (1872) 年学制を公布するが、近代日本の「子供」は、まず義務教育の対象として制度的に生み出されたといえるだろう。

しかし上から強制的に押し付けられた「子供」観が民間に浸透するには、もう少し時間が必要であった。20 世紀に入り学校制度を支持する中上流層の教育要求が高まる時期と連動して「教育玩具」ブームがおこり、近代教育をうける対象として幼児を含む子供全体が明確に意識される<sup>2</sup>。さらに明治末から大正期にかけて、文学上の主題として「子供」に新たな属性が加わり、子供を純粋で無垢な存在とみるロマン主義的な子供観が見出され、子供好きな人は善人であるというイメージも形成される。やがてこのようなイメージは、昭和初期には平和・友好などの語と重なり合うことで、国際関係のなかで積極的に活用されはじめるのである。

本研究の課題は、① 近代日本における子供の誕生が、昭和初期の日本人の意識にどのような影響を与えたのかを明らかにすることを視野にいれながら、② 黄色人種であり、アジアの一員でありながら、西洋列強の一員であらうとした、昭和初期の日

<sup>2</sup> 拙著『教育玩具の近代』（世織書房、2009 年）。

本人の屈折した心性の一端を描き出すことにある。

前著では主に②の課題に答えるために、子供を主役とする国際文化交流の先駆的事例として日米人形交流を位置づけ、そこにみられる排日移民法の成立から日米人形交流までの両極端な日本人の反応、朝鮮や大連の在留邦人の対応等に注目した。そしてそれらの検証と分析をとおして、近代化の過程で形成された当時の日本人の多くが共有する一等国のコンプレックスともいえる複雑な意識を浮き彫りにした<sup>3</sup>。それをうけて本研究では主に①の課題を明らかにするために、社会で保護され、教育される純粋無垢な子供というイメージが、日米人形交流の影響をうけて対外宣伝や国際交流に意図的に活用されるまでの道筋を探ることを目的としている。

その第一報として、昭和7年(1932)の満州国の対外宣伝の一環として派遣された満州国少女使節が、昭和2年(1927)の日米人形交流をモデルにしたものであり、それが国内外のイメージの形成のために子供・少女を活用するという方法を生み出したことを明らかにした<sup>4</sup>。そこで本稿では、満州国建国のきっかけとなった昭和6年(1931)の満州事変に関する『大阪朝日』新聞社の報道に注目して、国内のイメージ形成のために子供や少女などを主役にするという演出が活用される過程を描き出してみたい。

## 1. 満州事変と大新聞

### 満州事変による寡占化

近代戦争は国民戦争であり、国民の支持なくしては戦争を遂行できない。満州事変も熱狂的な国民の戦争支持の声に助けられ遂行されたが、問題は世論がどのように形成されたかにある。昭和6年9月18日におこった満州事変は、関東軍の謀略により開始されたが、国民はその事実を知らされることはなかった。中国側が満鉄線を破壊したので、この攻撃に対する正当防衛が満州事変であるという錯覚が作りあげられる。さらに10月24日国際連盟理事会が11月16日を期限に満州の撤兵を勧告する決議案を可決すると、「被害者のつもりが加害者あつ

かいされ」たとして国民世論は激高し、中国が巧妙な手を使って国際世論を味方につけたという誤解が浸透し、それは「事変への熱狂的な共感・支持となって噴出」するのである<sup>5</sup>。

満州事変における日本側の行動について、事実を歪曲した国民的規模の錯覚をつくりあげるにあたり、ともに大阪に本社があった『大阪毎日新聞』(以下:『大毎』)と『大阪朝日新聞』(以下:『大朝』)及びその姉妹紙である『東京日日新聞』(以下:『東日』)・『東京朝日新聞』(以下:『東朝』)の四紙、いわゆる大新聞が大きな役割を果たしたことは、すでに指摘されている。また満州事変の報道をとおして大新聞が部数を拡大し地方紙や小さな新聞紙を圧倒し、独占体制を築き上げたこともよく知られている。

例えば、朝日新聞社に注目すると、事変が起こる前の昭和6年正月の部数は『大朝』91万4,400部、『東朝』52万1,228部だが、昭和7年『大朝』105万4,000部、『東朝』77万369部 計182万4,369部<sup>6</sup>へと驚異的な伸びを示している。同年『大毎』150万8,371部、『東日』105万1,828部、計256万199部<sup>7</sup>で、新聞の二大中心地である東京・大阪の近接地では、すでに寡占化が進んでいたが、満州事変を契機にさらに拡大する。

『昭和六年版日本新聞年鑑』(第二篇現勢)は、昭和5年の東京各紙の販売部数(実売部数)を「Aクラス六十万台(二紙)、Bクラス三十万台(二紙)、Cクラス二十万台(二紙)、Dクラス十万台(三紙)」併せて約三百万部か」と推定している。「Aクラス」は『東日』『東朝』、「Bクラス」は『報知』『時事』のことだ。「かつては『国民』を含めて五大紙と称されていたのだが、今やランク分けができるほど懸隔が生じて」いる<sup>8</sup>。

### 新聞の論調の変化

そしてこれまでリベラルな主張を掲げ、軍縮の必要性を説き、軍部に批判的であった『朝日新聞』は、軍部の行動を極力支持する方針に一転する。そして在満軍隊慰問金をはじめ言論、報道、号外、ニュース映画、展示会、慰問使派遣、特派員戦況報告講演会など、社の総力をあげて満州事変支持の

<sup>3</sup> 拙著『青い目の人形と近代日本』(世織書房、2010年)。なお少女・子供等の日本国内の活用については拙稿「満州国建国と子供・少女と乙女の役割―満州国少女使節と協和会女性使節を中心に―」『渋沢研究』第26号を参照されたい。

<sup>4</sup> 拙稿「日米人形交流から満州国人形使節へ―国際交流における子供の活用―」『歴史評論』756号。

<sup>5</sup> 江口圭一『日本帝国主義史論』青木書店、1975年、162頁。

<sup>6</sup> 『朝日新聞社史』資料編1995年。

<sup>7</sup> 『毎日新聞百年史』1872～1972、1972年。

<sup>8</sup> 佐々木隆『日本の近代14メディアと権力』(中央公論社、1999年)297頁・348頁。

キャンペーンを展開するのだ。

『朝日新聞』の転換は、確かに「右翼の直談判、軍をあげての不買運動などの圧力が強ま」った結果であった<sup>9</sup>。だがそれと同時に国民の関心が集まる事変・戦争の報道戦に乗り遅れるわけにはいかなかった、という指摘も忘れてはならないだろう。「戦時報道には軍部の協力が不可欠なので反軍路線はとれない」、つまり「新聞の反軍・平和路線なるものは国際協調システムが機能しているときだけのもの」「新聞も商品なので売れねば企業体としてもたないという経営上の論理と非常事態に噴流する民族主義的・国家主義的情動が相乗したものが転換の起動力」<sup>10</sup>でもあった。

『大朝』の方針転換については、憲兵司令部からの極秘通牒「憲高秘第六五八号大朝、大毎両社ノ時局ニ対スル態度決定ニ関スル件報告」が、そのいきさつをよく物語っている。

昭和 6 年 10 月 12 日午後 1 時から 8 時まで同社の重役会議で、取締役、各部長が集合し今後の方針を協議した結果、「軍備ノ縮小ヲ強調スルハ従来ノ如ナルモ国家重大時ニ処シ日本国民トシテ軍部ヲ支持シ国論ノ統一ヲ図ルハ当然ノ事ニシテ現在ノ軍部及軍事行動ニ対シテハ絶対批難批判ヲ下サス極力之ヲ支持スルヘキコトヲ決定」した。そして翌 13 日午前 11 時より編集局各部の次長及び主任級以下 30 名を集めてこれを通達した。その席で「外務省ノ如ク軍部ニ追従スル意嚮ナルヤ」等の質問があったが、高原操編集局長は「現時急迫ナル場合微々タルコトヲ論争スル時機ニアラスト」と一蹴した<sup>11</sup>。

それでも社論を転換する『大朝』編集部が発は収まらなかったが、軍部の抗議をおそれた首脳部が人事刷新を断行することで納めた<sup>12</sup>とされる。

重役会議の方針転換をうけて『大朝』『東朝』は、10 月 16 日「在満軍隊慰問金募集」をはじめ、満州に駐屯する将士のために 1 万円をだし 2 万個の慰問袋づくり、原田取締役一行の慰問使を派遣する。「連日軍隊を歴訪して慰問と感謝の意」を表し、10 月 27 日には奉天で本庄繁閑東軍司令官を訪ね目録を手渡し「厚き慰問の言葉を述べた」。これに対して、本庄から「どんなに軍の志気を振作すること

か」と深い感謝があった（『東朝』1931.10.28）<sup>13</sup>。さらに一般の人々にも「満州駐屯軍慰問金応募募金」を募り（『東朝』1931.10.27）すでに一万数千円に達したので「第二回の慰問方法」を模索し、「十一月十五日より五日間排日ポスター展を本社に開催して支那排日の実相を展じ」ている。それはすべて前述の国際連盟理事会の満州の撤兵の勧告決議案期限（10 月 24 日～11 月 16 日）の間の出来事である。

#### 新聞への不安と不満

前述の部数拡大を含めて『大毎』『東日』及び『大朝』『東朝』の大新聞ほど「満州事変から直接の利益をひきだして成長した企業は、軍需産業や在満企業を別とすれば、おそらく他にない」。これを『朝日新聞社史』が言うように言論弾圧のやむえない結果と称するとすれば詭弁だ<sup>14</sup>という評価は確かにある。だが満州事変を原則的に批判する立場であった『東洋経済新報』も、昭和 7 年 2 月から 3 月に屈服している<sup>15</sup>ことからみても、やはり『大朝』の方針転換を一方的に責めることはできないだろう。ただしどのような理由であっても、新聞報道が画一化し、一面的な情報しか国民に伝わらないことに、当時から不安と疑問を抱いていた人々もいた。

例えば、雑誌『婦人之友』は婦人誌でもあり、あまり目立つことのなく気軽に発言できたのだろう。元新聞記者であった長谷川如是閑（1875～1969）は、次のような寄稿をしている。（ただし括弧内は引用者。なお引用文には一部現代仮名遣い常用漢字に改めたところがある：以下同じ）

今日の新聞を見て誰でも気のつくことは、どの新聞も、申し合はせたやうに、同じやうになつてしまつてゐることです。同じ内容を、同じ大きさで、同じ気分で、同じ興奮で載せているのだから、新聞はどれをみても同じものに見えます。…（昔の新聞は立場が違っていたが）どれもこれもが一樣なのに奇異の感を抱かざるを得ない筈です。だからもし一朝何か国家社会の大事が持ち上がると、新聞は報道から議論から写真まで、まるで号令をかけられたやうに一つになつてしまひます。現に今の新聞がそれです。

<sup>9</sup> 今西光男『新聞資本と経営の昭和史』（朝日新聞社、2007 年）102 頁、及び『朝日新聞社史』。

<sup>10</sup> 前掲佐々木『日本の近代 14 メディアと権力』、330 頁。

<sup>11</sup> 『資料現代日本史』8（大月書店、1983 年）96 頁。

<sup>12</sup> 前掲今西、114 頁。

<sup>13</sup> 大新聞の引用は『大朝』（1931.6.26 朝 5）のように『大朝』・『東朝』・『大毎』『東日』と略記し、年月日と朝・夕刊の別と掲載面の順に記す。

<sup>14</sup> 前掲江口『日本帝国主義史論』195 頁及び、『昭和の歴史』第 4 巻（小学館、1988 年）104 頁。

<sup>15</sup> 前掲江口『日本帝国主義史論』。



殊に満州に日本の軍事行動が起こされてからは一層です。…国家社会の一大事に当つて、国民が自分達に理解されない力で引きずられてゐるといふのは封建時代のやうなものです。今日の新聞は大衆を『引ずる力』の機関になつてゐますが、大衆を『理解させる』機関になつてゐるとはいはれないやうです。<sup>16</sup>

また昭和 8 年満州の問題で国際連盟からの脱退をめぐり日本中がぎくしゃくしていた頃、東京帝国大学教授で政治学者の蠟山政道 (1895~1980) 宅で行われた、「客問開放の会最近の国際事情」という座談会の内容を、『婦人之友』は掲載している<sup>17</sup>。出席者はリベラルな論調で知られる元『東朝』記者の評論家清澤冽 (1908~1945)、東京日日新聞の圓地與四松 (1875~1972)、東京帝国大学教授で国際法学者の横田喜三郎 (1896~1993) などであった。

清澤 …外国の新聞はどこかの国をみても、日本のやうに歩調が一致してゐない、従つて同じ国の新聞でも各自独自の意見があつて、一つのニュースにもそれが出てゐる。日本のはどの新聞もきちんと判でおしたやうに同じニュースばかりだ。殊に国際事情に関しては。

圓地 僕は記者はニュースを報道するだけで差つかへないと思ふ。何も英米独の国の新聞は主義主張をニュースの中に書いてゐるから日本もしなくちやならんとは思はない…

横田 (外国の新聞は各階級別の読者をもっているから同じニュースでも違った見方の報道になる) 従つて、各新聞の代表するグループが異なるによつて、新聞の意見も一致なくなる。それを現在の日本にあてはめてみると、日本の主張を通すためには、国際連盟で決裂してもかまわないといふ主張と、日本の主張を多少譲つても、兎に角和協を成立させることが第一だといふ主張と日本の新聞に二通り位の意見があつてもよいはずなのに、どの新聞も判で押したやうに同じだ。…新聞の代表する社会群の分化がまだ充分ではないことによると思ふ。

圓地 そりや無理だ、日本の新聞社に意見があるとすれば「どうやつたら読者にうけるか?」といふことしかありやしない。日本の新聞はな

んでもいゝから沢山売れることを目的としてゐる。そこへもつてきてその読者といふのが都会のインテリもあれば、百姓もある、女にもむくやうに、青年にもむくやうに、あらゆる階級のあらゆる人に一応満足のゆくやうにつくらなくてはならない。そのためには意見のある新聞なんかつくれつこありませんよ。

(略)

横田 だが圓地君、君だつて日本の新聞に異つた意見がないといふことが特色だ位は認めるでせう。

清澤 単に特色ぢやない、欠点だ。

満州事変が関東軍の謀略だったことが分かるのは戦後だが、多くの国民は新聞の一面的な報道からそれを正当防衛と信じたのである。それは確かに清澤のいうように日本の新聞の特色ではなく、大いなる欠点であった。

## 2. 排外主義と子供

満州事変の戦況をいちやく伝えるため、大新聞は激しい号外競争に突入する。新聞にとって号外はその真価を示す最大の宣伝戦であり、部数拡張競争の花であった。特に戦況をつたえる号外は読者の関心が高く、ニュース速報ではラジオが優位にたつたとはいえ、新聞社にとって「号外が依然として最大、最強の速報手段」であった<sup>18</sup>。さらにニュース映画、特派員らの戦況報告講演会での全国巡回、各種の展覧会などの催しも大成功をおさめ、大新聞はセンセーショナルなキャンペーンを展開する。そしてそれは女性や子供を含む国民全体を一面的な幻想に導き、排外主義の形成に大きな役割を果たす。

例えば、『大朝』(1931.12.1 朝 7) は、「子供の喧嘩は正義感から」という特集記事を掲載している。

児童が自然で正義感の強いものであることは近ごろの満州事変がいたく児童の心に浸み込んでゐるのでも判ります。このごろ急に喧嘩とまでゆかなくとも兵隊遊び戦争ごっこがふえて来ました。「はくは日本だ君は支那だ、さあ来い!」の声は随所で聞かれます。…児童には相ついで伝はる満州事変に天津事変、支那の暴戻さにわが国民の血はいや沸きに沸きかへつてゐるとき

<sup>16</sup> 「時局と新聞紙」『婦人之友』1932 年 3 月号、37~39 頁。

<sup>17</sup> 同上、1933 年 3 月号、37~39 頁。

<sup>18</sup> 前掲今西、97~98 頁。

わが少国民にもこの時局はどう映っているか、彼ら少国民の唯一の表現機関であり日ねもすの遊び友達である玩具について観てみませう

そして同紙は「ボクハニツボンゲンジン」と血をたぎらせて、戦争の玩具が飛ぶようにうれる世相を紹介している。大新聞には満州へ駐屯する関東軍への慰問関連の記事が並ぶが、その主役の一つは純真無垢な幼い子供であり、そして老人、女性という弱者であった。

「八十余の老婆も 可愛い園児も 挙つて兵隊さん慰問」(『大朝』1931.12.3.朝5) 大阪北区の幼稚園児 60 名が小遣いをためて醸金した記事が写真入りで掲載されているのをはじめ、「可憐な女児四人が 寒夜に行商して 儲けたお金を本社へ」(同 12.4.朝5)、「可憐な真心から 絞出した慰問金 面白い絵などを添へ 全市児童から九千円」「愛国少年の死 慰問金募集に出た 翌朝発病して斃る」(同 12.15.朝5) などの記事が連日ようにならぶ。もっともこれは『大朝』だけでなく、『大毎』も「少年が街頭で 募る『兄の一銭』 お砂糖の箱に銅貨二千六百枚 続々と慰問金集め」「ちり紙行商で 三少女が慰問金 本社を訪れて寄託」(『大毎』同 12.1.朝5) のように基本的には同じだ。

江口圭一は、この時期の『大朝』『東日』、陸軍省新聞班「つわもの」編集部編『満州事変の生んだ美談佳話第一輯』などに掲載された児童の作文 29 編なかで、その情報源を特定できるものを分析している。たとえ父親や学校の教師からの教えであっても、その基になる情報源が新聞社にあるものは 72.4% に及び、まさに大新聞の影響力は家庭だけでなく、学校や教師をとおして子供たちへ影響を与えた。さらに関東軍への「小学生の慰問熱はすさまじく、その寄贈・募集が一種の流行とさえ化した」ことにも言及している。だがこのような現象について、江口は次世代の子供への教化が徹底していたこと、女性、子供まで巻き込んだ排外主義の形成は大新聞の操作の産物だ、と指摘するにとどまっている<sup>19</sup>。

しかしそこには純粹無垢な子供をあえてセンセーショナルに取り上げることで排外熱を効果的に盛り上げる戦略として子供を意図的に利用したという側面が見落とされているのではないだろうか。社会的弱者である子供を中心にすえた紙面づくりに共感す

る(つまり近代的な子供観を共有する)だけの購買層がすでに形成されており、それを大新聞は部数拡大を図るために活用した、そしてそれを可能にさせたのが大正から昭和初期にかけての大衆文化の発展であった、と筆者は推測する。

次にその推測の根拠を『大阪朝日新聞』の「在満将士慰問のための小学生の作品募集」をとおして考察してみよう<sup>20</sup>。

### 3. 「在満将士慰問生徒作品」と子供

#### 小学生からの募集

『大朝』『東朝』は、「駐屯軍の将士を精神的慰安し、一層その志気を鼓舞するため」「全国小學校生徒諸君よりの慰問状」を募集する(『東朝』1931.10.28)。『大朝』1931 年 12 月 10 日朝刊 7 面に大きく掲載された募集の内容を紹介しよう。(ただし下線部は引用者: 以下同じ)

これから寒さの加はるにつれ満州の曠野に奮闘するわが将卒の労苦は実に言語に絶するものあるを思はせます。本社はこれら忠勇なる将士の陣営生活に心からなる慰問と感謝をさゝげるため、こゝに全国小學生諸君から左の趣旨の規定によりひろく慰問作品を募集して、純真無垢なる童心から遠く満州の将士に呼びかけたいと存じます。いつ如何なる場合にでも天真なる子供心ほど人の魂を打つものはありません、まして出征勇士の如く母国を離れて遠く満州の野に陣営生活を続けられつゝある人人に取つて、ふるさとの少年少女によるこの心からなる慰問と感激の声は如何ばかり感激とよろこびを以て迎えられるでせう何卒奮つて御応募下さい。

募集作品は「出征兵士の忠勇なる働きに対する感謝とその苦難多き陣営生活への慰問の真情を端的に表した感想文(又は童謡)並びそれにふさはしき自由画の二種」で、応募資格は「尋常小學校一年生より高等小學校二年までの生徒、各學校毎に男女各種目毎に一名づゝ(学年を問はず)四名以内の事」、感想文は八百字以内、自由画は紙四つ切以下、締め切りは本月(12月)25日としている。

<sup>20</sup> 前掲江口、朝日新聞「新聞と戦争」取材班『戦争と新聞』下(朝日新聞、2011年)第19章に作品は紹介されているが、いずれも詳細には触れられていない。

<sup>19</sup> 前掲江口『日本帝國主義史論』第5章・6章。

これは子供向であると同時に、部数拡大を視野に入れた大人向けの満州事変キャンペーンの一環であろう。明日を担う純粋で守られるべき子供（幼児や少女・少年）が、日本のために満州に駐屯する将兵を激励するという構図は、この頃すでに国民に好意的に受け入れられるテーマとなっていた。

#### 純情な真心の作品

昭和 7 年 1 月 24 日付『大朝』には、A4 版八頁の小冊子『在満将士慰問生徒作品』が読者に配布されている。表紙のタイトルの下には鹿児島市の小学四年生の童謡「兵隊進め」が掲げられ、その 2 番は「日本の兵たい勇敢に／とつかん とつかん そら進め／ごうれいかけてまつしぐら／支那の 兵たい追つばらう」という一節が踊る。【図 1】

中央には小学低学年ぐらいの男女がそれぞれ日章旗と旭日旗を両手に持ち万歳をする写真が「日本のヘイタイサンバンザイ」とキャプション付で掲載されている。そしてその右には小学 1 年生のカタカナの作文「シナノヘイタイヲシカツテクダサイ」（大阪市桃園小学校尋常一年生）であった。（ただし

下線部、括弧は引用者：以下同じ）

マンシユウ（満州）ノニツボン（日本）ノヘイタイサマ、アノサムイサムイマンシユウノノハラ（野原）デ、オクニノタメニイサマシクハタライテクダサルミナサマ、アリガトウゴザイマス。ワタクシハマイ日センセイ（先生）ヤオトウ（父）サマニマンシユウノミナサマノゴリツバナオテガラ（お手柄）ヲキイテ、ウレシクヨロコンデ井マス。ワタクシハシナ（支那）ノヘイタイガニクテナリマセン。ドウゾワタクシヲチニカハツテシカツテクダサイ。ワタクシハマイアサウヂガミサマニ、オイノリシテ井マス。ワタクシヲチノニツボンノヘイタイサマ、ドウカ、オカラダヲタイセツニシテ、ソシテ一日モオハヤクガイセンシテクダサイ。デハゴキゲンヨロシク。ニツボンノヘイタイサマバンザイ。

そしてその左には「心をこめてこの作品をさぐ」として、次のようにこの小冊子刊行の趣旨が述べられている。

満州の兵隊さんに真心こめてこの作品をさぐげます。これは全国小学生から本社で集めました慰問作品中入選の優秀作のみです。どうかこの純情をお受け下さい。そしてあなたの方の背後にあつてこの幼き人々がいかに愛国正義の至情に燃え、あなた方への感謝に小さな胸を脈打たせてゐるかを御想像下さい。荒涼たる雪の陣中生活に、この幼きもの、捧ぐる心の火が幸ひ喜びと慰安とを以て迎へられんことをこひねがふものであります。

#### 健全な国民教育の成果

小冊子は新聞の購読者全員に附録として配布されたい。作品は「公募期間が短かったにもかかわらず 2,600 点余に上り、入選 32 点と佳作 200 点を選抜して紙上に発表した」。そしてこの他に優秀作の自由画は『コードモアサヒ』4 月号に色刷りで掲載されるという。最終ページ（七頁）には審査の評が次のように述べられている。

「審査をすまして」

（これらの作品は）今回の事変に対する国民一般の冷静にして公正なる批判、特に満州に対す



【図 1】 1932 年 1 月 24 日付『大阪朝日』朝刊別刷一面（筆者蔵）



る認識の十分であることが彼等の後継者たる少国民の書いたものにもハッキリとあらはされてゐることである。小学生の頭にも我国の公正な態度や世論が正しく反映してゐる証拠といつてよい。

即ち今度の事変は日本の正しい權益擁護のためにやむをえず干戈を動かしてゐるのであることを十分に認識してをり、そのために出動してゐる多数軍人の苦戦に対しては、実に満腔の感謝と同情を捧げてゐる。のみならずこの国家多難の秋に際して、国民が何を目的に進むべきかをもはつきり理解してゐるのは心強い。これは現下のわが国民教育が極めて健全に甚だよく徹底してゐることを物語るものであろう。

したがって感想文はいづれも「その内容、その構想を一つにしたおきまりの格」に陥っているようだが、「国民精神の大きくハッキリ」とした反映なのでそれはやむをえないという。では満州事変に対する正しい認識の反映とは何か、その一例を紹介しよう。

#### 満州事変への正しい認識

それは日本の權益、生命線をわが物顔に踏みにじる鬼や獣のような中国人、この非道の敵と世界平和のために日本人は戦っているという認識である。

日清日露の戦に数万の貴い人命を犠牲にし何億ともしれぬお金をかけた満州を我が物顔にふみにじり、無残にもわが日本人を殺したりする支那人は、決して人間とは言へないと思ひます。さうです先生の仰しやつた様に「満州は日本の生命線だ、鬼や獣の様な支那人に委せてはならないのだ。世界平和のために我が日本帝国のために何としても満州を守らねばならないのだ」と思ひます。(兵庫県多可郡重春小高等二年)

大君の御為に

先生に伺へば、満蒙の地は我国にとつてどうしても離されぬ大切な所だそうでございます。それに私達の父祖は、日清日露の両役に二度までもここに尊い血を流し、幾多の尊き屍を埋めて居ります。この大切な地、この尊い地をあの惨逆(ざんぎやく)な無道な人々にどうしてむざ、踏みにじられて宜しいでせうか。

どうぞ、私達の祖国のため、父祖のため、いえ、わが一天万乗の大君の御ため、あくまであ

の非道な敵と戦つて下さいませ。内地に留まつてゐる者は、誰も彼も皆あなた方をたよりにしています。(神戸市明親小学校高等一年)

昭和6年当時、日露戦争は26年前のことであり、多くの人が日露戦争を体験していた。そうでなくても、日清日露の戦争の犠牲、つまり“十万の生霊、二十億の国帑”の犠牲により獲得したのが満蒙權益だというイメージが教育を通じて植えつけられていた。そして中国人への蔑視感などが満州事変におけるマスコミのセンセーショナルな報道により噴出し、不況にあえぐ日常生活へのうつぶんのはけ口となった。そして「いつの間にか、単なる權益ではなく満州の地そのものが日本のものであるという觀念さえいだかれるようになり、それを中国に奪われてなるものかという転倒した判断が下された」、と江口圭一は指摘している<sup>21</sup>。

その構図は文部省構内財団法人社会教育会が「将来の日本を担ふべき少国民にも、満蒙を正解し、正しい日本の立場をしらしめるために」「小学校上級児童、女子青年団員及び一般家庭に普及」にむけて作成した子供向の冊子『満蒙読本』も同様である<sup>22</sup>。これこそが「国民精神のおおきくハッキリ」とした反映であり、「国民教育がきわめて健全に甚だよく徹底している」ことを物語っている証拠なのだ。

#### 正義の味方

従つて「正しい權益擁護」のためやむをえず戦っている満州の将兵は、いさましい旗をなびかせ、悪い支那人を降参させ、わからない支那人を善い方向に導く正義のヒーローとして称賛される。【図2】

日本の兵隊さんは「正しいから」きつと勝つと、みんないつてゐます。僕もさう思ひます。そして勝つて早くお帰りになるやうに神様にいのつてゐます。(長崎県稲佐小学校尋常3年)

早くいぢわるの支那人兵にひかうきからばくだんでもおとして下さい。今でもちつと目をつぶつて見ると、満州のせんそうがうかんで見えます。いさましい日本のはたが立つてゐるのが見たいのです。(大阪府小2)

<sup>21</sup> 『昭和の歴史』第4巻、小学館、1988年、109～110頁。

<sup>22</sup> 前掲「日米人形交流から満州国人形使節へ」参照されたい。





【図 2】 1932 年 1 月 24 日付『大阪朝日』朝刊別刷二面

…大和魂を一寸のまも忘れず、支那をこうさんさせて見事に我が国の力を示して下さい。…世界の中心に在り、世界の目じるしとなつてゐる我国こそ、非常な重大なつとめを持つて平和を守らねばならないのでありますが、私達がいづも笑ひながら安心して眠る事のできるのは、皆兵隊さんのおかげであります。…あなた方は平和の守り神様です。早く悪い支那を降参させ、日の丸の旗を輝かしながらいせんの時をおまち申します。(熊本県小四)

わからない支那人を善いやう導いてやつて日本の平和東洋の平和のために「十分身体に気をつけて健康で」奮闘して下さい。(岸和田市小六)

ただしこれらは満洲の兵隊にむけてというよりも、同時に国内の大人にむけた純粹無垢な子供からのメッセージという意味も含まれているだろう。

#### 4. 子供の美談と幣原家の軍国少女

##### 子供の美談

子供を中心とした美談は数えきれないが、例えば『東日』は次のような記事を掲載している。本所の押上市民館の子供たち二百人が、浅草観音の護符を贈ったことがきっかけで関東軍の軍曹と上等兵と文通していた。満州事変がおこると、彼らを慰問するために皆でわずかな小遣いを集め 6 円の慰問金を贈ったところ、自分たちは軍隊から小遣いをもらっているの、これは戦死者の遺族に贈るようにと返されてきた。それに子供たちが感激し、「われ等の兵隊さん」として話題の中心になっているという(『東日』1932.5.13 朝 8)。

そして『大阪朝日』は、満州国建国に反対する反満州国軍に奉天の小学生がメッセージを送ったことを記事にしている。

可愛い勧告文 奉天の学童が反満州国軍に奉天市各小学校では今度可愛い小学生から熱誠をこめた勧告文を北満一帯の反満州国軍に送ることとなつた。その手紙には「叔父様、叔母様、お兄様、お姉様、貴方は何故満州国に反対されるのですか、私達はこの上もないこんなに幸福になつて毎日学校に通つてゐますのに」と心をこめて満州国への協力を勧告したものである(『大阪朝日』1932.6.3 朝 11)

このように子供に関係する美談が数多く登場するが、なかでも英米との協調外交を推進し軍部や右翼から軟弱外交として非難された幣原喜重郎家の軍国少女に関する報道は興味深い。

##### 映画のモデルになった軍国少女

『大阪朝日』は 6 月 13 日朝刊 7 面の約半分をとり、「健気な軍国少女映画にもなった 荒木陸相、鳩山文相の感激」の見出しと「軍国少女静江さん」の写真とともに、幣原家をおわれ一家離散の憂き目にあった少女に関する、次のような記事を大きく報じている<sup>23</sup>。【図 3、4】

「元外務大臣幣原喜重郎男爵邸に使われていた下僕の家族が満州事変に活躍する皇軍戦士の労苦を偲び辻占を売り零碎(ママ)金をかき集めて慰問金として寄付したことに端を発し同僚の嫉妬から下僕は

<sup>23</sup> 『東朝』6・13 日朝 7 は『大朝』ほどセンセーショナルではなく中央左 4 段で少女の顔写真一枚程度である。



【図3】 1932年6月13日付『大阪朝日』朝刊七面



【図4】 同上

男爵邸に居堪らず」一家十一人が離散し、東京から大阪にたどり着き中之島音楽堂のルンペン達から同情を寄せられている物語がある。

すなわち一家は皇軍の慰問金を出そうとしたが給料ではたりず、12歳の長女が辻占をうり5円25銭を慰問金として差し出した。これが荒木陸相、鳩山文相の耳に入り映画化され美談として世間にひろがると、幣原家の小使取締している男が「男爵家の雇人家族が辻占を売つては困る」と言い、その上一家の美談が同僚に嫉妬され皆と折り合いが悪くなり、一家の主である父金子音吉が解雇され一家は離散した。

それは彼女が映画『戦争と少女』の主人公にな

り、「鳩山文相も静江さんとともにスクリーンに見え、美しい純情を謳つた映画が巢鴨館に上映されると花束を贈り健気な軍国少女としてその善行を表彰した」ので、町内でも美談少女をだしたことを喜び大々的に表彰式を計画していた矢先の出来事であった。

#### 軍国少女とルンペン

音吉は行方不明となり、妻子8人は大阪に流れ着き中之島音楽堂を仮の宿としたが「足腰のたぬ病身のふゆ（7歳）や子供たちの悲惨な姿に群がるルンペン達は己が身の惨めさを忘れて」親身に世話をした。そして音吉の捜索願いを受理した天満署では、一家の救済策を講じることにした。

ここでは理不尽な不幸におそわれた軍国少女を社会の最下層にいるルンペンでさえ守っていることも、この記事の重要な主題の一つになっている。さらには幣原家から冷たい扱いを受けた健気な軍国少女というイメージが強調されている。

満州事変前の昭和5年（1930）末から昭和6年（1931）の初頭にかけて、鉄道問題を焦点とする満蒙問題で幣原「軟弱外交」への攻撃は再燃していた。満州事変不拡大の方針をとる若槻内閣の外務大臣幣原への風当も強く、同年12月第二次若槻内閣は総辞職し、犬養毅内閣に交替する。その犬養も5月15日、いわゆる「5・15事件」により暗殺され、戦前最後の政党内閣は崩壊し、5月26日に齋藤実による挙国一致内閣が成立した直後であった。そして幣原は軍部の行動を全面的に支持する新聞の論調を、「偏狭なる排外思想」と非難したことはよく知られているが、彼は国民の排外熱を煽るためにもスケープゴードにしやすい存在であった。

さらに「ルンペンさんの親切も嬉しかったワ」という見出しで後日談も報道されている。父親が東京で働いていることがわかり少女一家は帰京することになったが、途中下車した駅の「待合室は『あれが哀れな軍国少女一家だ』と人の黒山」、一家は新しい浴衣で中之島公園にたどりついた時の惨めさとは打って変わっていた。少女は一番うれしかったことを尋ねられ「お父さんの居所がわかったこと、中之島公園でルンペンさんが親切にしてくれたこと」と答えている。（『大朝』6.16朝11）

#### おわりに

日露戦争後の日本では、「民間レベルで外国との友好関係や国際平和の維持を目的とした国際的な親

睦団体」が多数誕生する<sup>24</sup>が、国際交流や対外宣伝にかかわる美談の主人公として、女性・子供が登場をはじめるのは、昭和初期に入ってからだ。そして子供・少女が積極的、そして意図的にマスコミにセンセーショナルにとりあげられる。つまり大人の社会の国際紛争を浄化させるイメージ戦略の柱として、子供は少女、そして若い未婚の女性とともに、平和の使者や感動・美談の主人公として積極的に取り上げられはじめる。そのきっかけが昭和6年の満州事変であった。

すでに指摘したように挙国一致的なムードを盛り上げ国民世論を形成するために、けなげな子供・少女が平和・友好を訴える姿は、人々の共感と同情を得やすいテーマであることを、マスコミや文部省をはじめとする教育関係者は、日米人形交流の成功体験をとおして学んだ。それが満州事変をきっかけとする報道合戦により少女・子供が、平和・防衛（権

益擁護）のための戦争と結びつき、有効なイメージ戦略の一つとしてあらわれはじめたのである。『大朝』『東朝』の『在満将士慰問生徒作品』（「全国小學校生徒諸君よりの慰問状」）の募集は子供向であると同時に部数拡大を視野に入れた大人向けの満州事変キャンペーンの一環であったと推測される。

つまり満州事変をきっかけとする大新聞の報道合戦のなかで、少女・子供が平和・防衛（権益擁護）の名のもとに戦争と結びつき大衆の支持を得やすいテーマとして取り上げられるのだ。明日を担う純粋で守られるべき子供（幼児や少女・少年）が、日本のために満州に駐屯する将兵を激励するという構図は、1930年代の日本ではすでに国民に好意的に受け入れられるテーマとなっていた。すなわちこの頃、いわゆる近代子供観は大衆化をはじめていたのである。

---

<sup>24</sup> 松村正義『国際交流史—近現代の日本』（地人館、一九九六年）214頁。